

平成30年6月6日現在

機関番号：37102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580011

研究課題名（和文）日韓山岳宗教の比較研究 その聖地観・神観念・宗教的实践をめぐる

研究課題名（英文）A Comparative Study of Mountain Religion in Japan and Korea: Views of Sacred Places, Ideas about Divinity, and Religious Practices

研究代表者

須永 敬 (SUNAGA, Takashi)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：90390004

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、北部九州の英彦山・朝鮮半島南部の智異山という日韓を代表する山岳宗教聖地の調査研究を通して、聖地観・神観念・宗教的实践の比較考察を行った。具体的には、日韓山岳聖地の現地調査に基づく聖地構成要素（窟・泉・岩・塔・寺院・廟・祠など）の把握、日韓山岳宗教に関する文献・図像資料に基づく山岳宗教の歴史の変遷の考察、日韓山岳周辺地域における現地調査による山岳宗教の民俗的意義の考察、である。この比較研究によって、日韓双方の山岳宗教の歴史、およびその実態を相対的に思考する視座を得ることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study conducted surveys at Mount Hiko in Northern Kyushu and Jirisan in the Southern Korean Peninsula, both sacred sites for the mountain religions of Japan and Korea, respectively, to compare their views of sacred places, ideas about divinity, and religious practices. Specifically, this study aimed to 1) understand the elements of sacred places based on on-site surveys of sacred places in the mountains of Japan and Korea; 2) consider the historical transformations in mountain religions based on the literature and illustrations of the mountain religions in Japan and Korea; and 3) consider the folk significance of mountain religions through on-site surveys of the surrounding mountain regions in Japan and Korea. This comparative research contributed to a more accurate historical understanding of the mountain religions in both Japan and Korea, as well as a more informed appreciation of the relationships between their religious values and practices.

研究分野：宗教学

キーワード：山岳宗教 修験道 英彦山 智異山 国際情報交換（大韓民国）

1. 研究開始当初の背景

日本における山岳宗教研究を牽引してきたのは、修験道研究・民俗学研究の分野であったが、その研究領域は日本国内に止まるものであり、比較研究的な視野が十分とは言えなかった。このようななか、北部九州では九州山岳霊場遺跡研究会が組織され、学際的な山岳宗教研究が進展し、朝鮮半島・中国大陸との山岳宗教交流の様相が指摘され始めている。一方、韓国においては国立慶尚大学校と国立順天大学校による智異山圏文化研究プログラムがHK（日本のCOEに相当）に採択されるなど、北部九州と朝鮮半島南部における山岳宗教研究の機運が共時的に高まりをみせている。

研究代表者は、これまで北部九州と朝鮮半島南部における民俗宗教研究を継続的に実施してきた。その途上において、両地域の山岳宗教の内容（聖地構成・縁起伝承・宗教者と民衆との関係性など）に高い近似性が認められることに注目した。その一方で、両地域の山岳宗教については差異も認められる。本研究では両地域の山岳宗教の歴史性と実態に基づく考察により、その理解をさらに前進させようとするものである。

2. 研究の目的

本研究課題は、北部九州の英彦山・朝鮮半島南部の智異山という日韓を代表する山岳宗教聖地の調査研究を通して、次の3点を明らかにすることを目的としている。

①日韓山岳聖地の現地調査に基づく聖地構成要素（窟・泉・岩・塔・寺院・廟・祠など）の把握。②日韓山岳宗教に関する文献・図像資料に基づく山岳宗教の歴史の変遷の解明。③日韓山岳周辺地域における現地調査による山岳宗教の民俗的意義の解明。

以上の比較検討を通して、日韓山岳宗教聖地に関する比較研究の基礎確立、文献資料・図像資料等の活用による研究方法の確立、国境を越えた山岳宗教研究の視座の確立、等の学術成果がもたらされると考える。

3. 研究の方法

日韓山岳宗教の特徴を効果的に調査研究するため、調査地を北部九州の英彦山、朝鮮半島の智異山という日韓を代表する山岳聖地とその周辺に定めた。さらに、調査地域を山内聖地・山麓村落・遠方村落の三つに便宜上分類するとともに、調査対象を聖地構成・神観念・宗教的実践の三点に特化した。

山内聖地については現地踏査を通して聖地の構成要素（窟・岩・水場・塔・寺院・廟・祠など）を把握するとともに、相互の関係性を検討した。また、山内聖地は、仏教・修験・シャーマニズムなどによって多様な解釈や意味づけがなされるが、これは登拝口となる山麓村落の宗教者の性格によって規定されている。このため山麓村落における宗教施設や神観念、宗教的実践を調査することが山岳

宗教を考える上で重要になる。さらに、山岳宗教においては遠方村落からの信仰が認められる点も日韓に共通している点であり、遠隔地信仰としての山岳宗教のあり方にも注目した。

なお、本研究の遂行にあたっては、英彦山神宮・添田町役場、国立慶尚大学校慶南文化研究院・国立順天大学校智異山圏文化研究院の協力と助言を得ることができた。

4. 研究成果

(1) 日韓山岳聖地の構成要素

英彦山内には奉幣殿・下宮・中宮・上宮といった建築物や祠を伴う聖地のほかに、磐座・奇岩・洞窟・泉といった自然の環境を聖地としてみなす信仰が存在している。このうち、特に洞窟聖地については「四十九窟」と総称され、英彦山修験道の大きな特徴をなしている。このような窟を聖地とみなす信仰は、鎌倉時代の『彦山流記』にも確認でき、中世にはこれらの窟においてさまざまな祭祀や祈禱が行われていた。しかし、近世以降これらの窟の多くは信仰が失われ、現在はその存在すら忘れられた窟（五窟など）も多い。

一方、玉屋窟（玉屋神社・図1）・豊前窟（高住神社）・大南窟（大南神社）のように、窟が神社となり今に信仰が続く事例もある。たとえば玉屋窟（般若窟とも）は、四十九窟中の第一の聖地であり、窟内部にある霊泉は、万病を治し、白髪を防ぎ、紅顔を増す霊水とされる。この玉屋窟は修験廃止後は玉屋神社となり、旧暦6月3日には英彦山神宮の神職によって「御池浚い」という神事が行われている。この際に神職たちが窟内に入って霊水を汲み、参拝者たちに分け与える。

また、奇岩や窟といった自然の造形や植生分布と、天台の四土結界思想（常寂光土・実報嚴土・方便浄土・凡聖同居土）とを対応させ、山という自然を宗教的コスモロジーによって解釈した点も、英彦山修験のユニークな信仰であると考えられる。



図1 玉屋窟（現・玉屋神社）

韓国の智異山内には寺庵が多く存在しているが、英彦山同様に自然の環境（巨石・奇岩・洞窟・泉・河原など）が特別な場所として聖視されていることが確認できた。たとえば智異山最高峰の天王峰には「天柱岩」と刻

まれた巨岩があり、かつてはその前に聖母像を祀る聖母祠が祀られていた。また山中には特徴的な形をした岩や巨岩（「カルバウイ／刀岩」「ウルサンバウイ／蔚山岩」など）が数々の伝説を伴って存在している。また法界寺境内に祀られる山神閣の背後には「山神大君閣」と刻まれた巨岩があり、その岩陰からは泉が湧いている（図2）。日本でいう磐座の信仰と同様の事例が認められるのである。

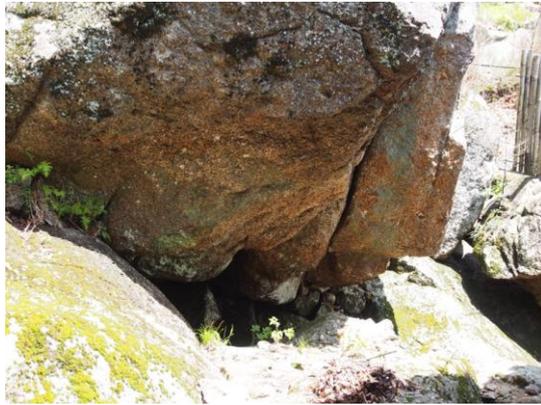


図2. 法界寺背後の巨岩（山神大君閣）

また、山内には多くの窟が存在しており、様々な宗教者たちによって聖地として解釈されている。仏教の僧たちはこのような窟で瞑想による禪行を行うことがある。夏安吾などの比較的短期間の場合もあれば、数年間におよぶ窟籠りを行う僧もいる。また龍遊潭や白武洞の周辺には巫者たちによって聖視されている窟があり、祈禱やクツ（巫俗祭祀）などが行われている。これら山内聖地については、風水思想による説明が伴うことが通例である。たとえば龍遊潭という河原の窟は、龍の伝説をともないつつ、ここが風水上の吉地であると語られる。

このように、英彦山・智異山ともに巨石・奇岩・洞窟・泉といった山内の自然造形・自然環境が、宗教者によって聖視される点には、両者の近似性を認めることができる。一方で、これら山内聖地を体系的かつ統一的に解釈する視点が英彦山で認められるのに対して、智異山の山内聖地は個別性が高く、これらを一体のものとして捉える思想はない。このことは、日本近世にみられた修験道という宗教制度の有無に起因していると思われる。一方、智異山や韓国の山岳宗教では風水思想によってそれぞれの山岳聖地の位置づけをなしていることが確認できる。

（2）日韓山岳宗教の歴史的変遷

英彦山の山岳宗教の歴史については、英彦山霊仙寺のもとに展開した英彦山修験道に関する調査・研究でおおよその流れが既に明らかとなっているが、松会という近世祭礼の様子を描いた『松会絵巻』などの分析から、これら英彦山修験の実態が、仏教・神祇・巫俗といった多様な宗教者の集合体であるこ

とが分かってきた。

また、修験廃止後の英彦山については、これまで研究蓄積も乏しく、不明な点が多かったが、本研究では英彦山神宮の協力のもとに明治期から昭和初期までの『神社日誌』の撮影と分析を進めた。その結果、英彦山修験道終焉後にも多くの修験たちが山内に残り、それぞれの活路を模索していた様子がわかってきた。特に、明治10～20年代にかけては、神社派・教会派（神理教）・修験派といったグループが形成され、それぞれが英彦山信仰の本流であると自認し、つばぜり合いを繰り返していた様子が初めて明らかとなった。

このように、英彦山の山岳宗教は、集合と分散とを繰り返す中で展開していったことが明らかとなった。ただし、修験道時代において統合されているように見える修験者たちも実は多様な宗教実践者たちであり、また修験廃止後に中核を失って分散したようにみえる宗教者たちも英彦山信仰という一点においては共通している点には注意が必要である。

一方、韓国智異山については、英彦山の霊仙寺のような宗教的中核が不在であるため、統一的な宗教体系が形成された歴史を有しておらず、儒教・仏教・巫俗それぞれの担い手によって、個別的に崇拝が行われていた。その様相は朝鮮時代から近代にかけて作成された『遊山記』と呼ばれる山行記類によって知ることができる。朝鮮時代の『遊山記』は主に儒者によって記されたものであり、山中で出会った宗教者や聖地についての記載が所々に認められる。儒者の視点によって記されたものが多いため、仏教・巫俗に関する記述は基本的に「蒙昧」「淫祠」といった扱いを受けているのであるが、仏僧の道案内を受けたり、山中の寺庵に宿泊したり、智異山の巫俗に関する伝説を書き記したりもしている。

このように、一見すると個別性が高いように思われる智異山の山岳宗教であるが、さまざまな宗教者たちが乗り入れる形で信仰していたものとして、天王峰山頂に祀られる聖母神を挙げるることができる。この聖母神は『東国輿地勝覽』にも記載がみられる神であるが、その実体については高麗始祖王母・仏母・巫祖といったさまざまな解釈で記されている。このような神格の多様性は、この聖母神を祀った宗教者の多様性をそのまま示すものと考えられる。また、智異山聖母神の伝説として有名な話は、法祐和尚と聖母天王が夫婦となり、その8人の娘たちが朝鮮八道の巫者となったというものであるが、この伝説などは仏教と巫俗との習合を窺わせるものとして興味深い。実際『遊山記』には、天王峰の山頂で僧が手に小仏を持って舞い、晴れを祈ったという記述なども記されている。さらには儒者が巫俗の祭場である龍遊潭で祈雨祭を行った記録も見られるなど、智異山内において諸宗教が習合的なあり方をみせて

いた様子が確認できる。

以上の山岳宗教のあり方を比較すると、信仰が統一・体系化された英彦山と、信仰が分散・個別的である智異山と、両者の間に大きな相違を認めることができる。それは前述のように日本近世の修験道という宗教制度の有無に起因するものと思われる。しかしながら、英彦山修験の内実が多様性に満ちたものであったことや、智異山の山岳宗教は聖母神という共通する崇拝対象を有していたことは注目しておく必要がある。

(3) 日韓山岳宗教の実践と実態

修験廃止後の英彦山はその宗教的統一性を失い、さまざまな宗教者たちが関与する場となった。国家神道の道を選択した英彦山神社（現・英彦山神宮）は、これら宗教者・信者たちを包み込むことはできなかった。その結果として、今日も英彦山とその周辺には「英彦山」の名を冠するさまざまな宗教法人在り存在しており、個別に活動している。また、飯塚・行橋といった比較的遠距離の宗教者たちもまた英彦山を行場、あるいは祈禱の場としており、その際には前述の窟（玉屋窟・大南窟など）といった修験の聖地が一つの拠点となっている。

たとえば、(1) で述べた玉屋神社の「御池浚い」には参詣者たちが集まるが、そこに集う多くの方は、英彦山神宮とは関係のない、周辺の新宗教・民間宗教者の信者たちであった。まったく異なる宗教者たちが、玉屋窟の聖水によって結びついていたのである。

しかし、このようななか近年になって英彦山神宮を中心に、英彦山に関わる宗教者たちに大きな変化が起こりつつある。英彦山神宮が下宮において般若心経を念ずる「教読みの会」を発足させるとともに、禰宜が仏教寺院に入り修行を行ったのである。また、英彦山神宮の祭礼に周辺寺院の僧や諸宗教者たちへの参加を呼びかけた。たとえば図3は先述した玉屋神社の「御池浚い」の様子であるが、ここには齋主となる神職のほか、民間の修験団体や民間巫者などが神事に参加している様子が写っている。修験廃止後、個別分散化していく一方に思われた英彦山の宗教者たちが、修験復興の名のもとに再び統合を目指そうとしているのである。



図3 玉屋神社「御池浚い」(2015年)

一方、韓国智異山の宗教実践はどのようなものであろうか。智異山の宗教者は仏僧・儒者・巫者など多様であり、智異山の宗教者という一体性も有していない。たとえば智異山およびその山麓には「智異山」の山号を持つ多くの寺院が存在しているが、これら寺院を一体として、あるいはつながりを持つ存在として捉える発想は確認できない。この背景には朝鮮時代の排仏政策の影響があると思われるのだが、それぞれの寺院は独立性が高く、寺院の位置する山内・尾根筋・谷ごとに個々別々の宗教世界を形成している。また、巫者についてみれば、大規模なクッなどで巫者同士の助勤関係がみられるものの、その関係は流動性が高く、基本的には個人個人の活動を基本としている。

ただし、ここで注意しなければならないのは、仏僧と巫者といってもそう簡単に二分できる訳ではない点である。たとえば智異山南麓の某尼寺の女性住職は、曹溪宗の僧籍を持つ僧なのであるが、若い頃巫病にかかり、師から明図（巫者が師から伝授される神鏡）を継承し、自らは占いを行ったり、信者を伴って智異山天王峰に登り祈禱をしたりするなど、その実態はあまり巫者と変わらない。また、智異山南麓の某村では、儒者が巫俗と道教とを融合させたような宗教活動を展開している事例も認められる。

また、智異山の宗教者は個別性が高いと前述したが、同時に共通性が認められることも興味深い事実である。それは聖母と称される女神への信仰である。たとえば、智異山中・山麓に点在する寺院の境内には山神堂が祀られるのだが、その山神図像は女性の姿で描かれるものが多い。また巫者たちは祈禱やクッの際に智異山聖母への祈りを欠かすことは無い。

さらに近年になってこの智異山聖母に対する信仰心の高まりが見られる。『東国輿地勝覧』には倭寇が自分たちを助けなかった聖母神に憤り、聖母の石像に切りつけた、という伝説が記されている。1960年代まで、天王峰山頂にはこの像とされる聖母像が祀られていた。その後この像はしばらく行方不明となっていたのだが、某氏の霊夢にたびたび現れ、探し回った結果見つかったとされる像が、智異山南麓中山里の天王寺に奉安され、現在慶尚道の民俗文化財に指定されている（図4）。

この像は、近年になって智異山のシンボリックな位置を占めるようになっており、国立公園の入園券、展望台、観光案内所等に次々に設置され、さらに中山里地区には天王寺の聖母像とは別に、巫者によって礼拝・祈禱が可能な巨大な聖母像が新たに作られた。また智異山中の法界寺山神閣はやはり女神山神像を祀っているのであるが、その堂の外壁には、『東国輿地勝覧』の伝説が絵画として描かれた。また智異山南方の青鶴洞の習合的儒者は、現在聖母像を祀る巨大な屋外宗教施設を作

っている。智異山の諸宗教者たちは、聖母という相互乗り入れ可能なアイコンによって結びついているとも言えるのである。



図4 智異山聖母像(天王寺)

このように、日韓山岳宗教の実践面をみても、日韓双方の山岳宗教のあり方を相対的に思考する視座を得ることができる。韓国の山岳宗教の実態から日本の修験道を逆照射すれば、その内部に宗教的多様性が含まれ混まれていることが見えてくる。逆に日本の事例を踏まえて韓国の山岳宗教を再確認すると、個性性のみならず智異山という自然環境のなかで諸宗教者たちにつながるの意識が形成されていることを確認することができる。

(4) 今後の課題

以上(1)～(3)にまとめたように、本研究課題では日本の英彦山と韓国の智異山との山岳宗教の比較研究を行うことによって、これまでにない視点から両国の山岳宗教を比較考察することができたと考える。

ただし本研究は、英彦山・智異山という日韓双方の一霊山を取り上げただけであり、日本・韓国という国家レベルに敷衍した場合にどの程度の汎用性をもつものなのかは今後の検討課題である。また、今回は日韓の山岳宗教を取り上げたが、その理解をさらに深めるためにはやはり中国大陸の山岳宗教との比較研究を交えた「文化の三点測量」が必要になると思われる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

①須永 敬、近現代における英彦山信仰の〈分散〉と〈統合〉、第7回九州山岳霊場遺跡研究会資料集『英彦山—信仰の展開と転換—』(招待・査読無)、2017、pp. 29-38、

②SUNAGA Takashi、Japan's sacred mountain landscapes and the natural environment: The case of mountain asceticism at Mount Hiko、Journal of Mountains and Humanities、Vol.3 (査読有)、Mt. Jiri Region Cultural Studies: Sunchon National University & Research

Institute of Gyeongnam Culture: Gyeongsang National University (Korea)、2016、pp. 13-29、

③須永 敬、明治初年の英彦山神社教会設立に関する一考察—壱岐の旧英彦山派修験との関係から—、『九州産業大学国際文化学部紀要』62 (査読無)、2015、pp. 13-25、

[学会発表] (計5件)

①須永 敬、近現代における英彦山信仰の〈分散〉と〈統合〉、第7回九州山岳霊場遺跡研究会(研究報告&シンポジウム「英彦山と神仏分離」)、2017、

②須永 敬、「修験」不在の山岳宗教—韓国・智異山の事例から—、日本宗教学会 第75回学術大会(パネル発表「山岳宗教の再構築」)、2016、

③SUNAGA Takashi、Japan's sacred mountain landscapes and the natural environment: The case of mountain asceticism at Mount Hiko (「日本の山岳聖地と自然環境—英彦山修験道の事例から—」)、The 4th International Conference of East Asian Association of Mountainous Culture (招待講演)、2015、

④須永 敬、「明治期英彦山信仰の正統性をめぐる神社派・教会派・修験派の対立」、日本山岳修験学会第36回高尾山学術大会、2015、

⑤須永 敬、「現代日本山岳聖地中の宗教実践百態—从修験道廃止后英彦山的事例说起—」(「現代日本の山岳聖地における宗教的実践の諸相—修験道廃止後の英彦山的事例から—」)、The 22nd International Congress of Historical Sciences (ICHS2015) Taian Satellite Conference (招待講演)、2015、

[その他] (計2件)

その他発表論文

①須永 敬、英彦山の祭礼今昔—巫女・芸能者・翁—、『霊峰英彦山—神仏と人と自然と—』、九州歴史資料館、2017、pp. 154-159、

②須永 敬、「修験」不在の山岳宗教—韓国・智異山の事例から—、『宗教研究』90 (別冊)、日本宗教学会、2017、pp. 87-88、

アウトリーチ活動 (計2件)

①須永 敬、秘密の英彦山—英彦山修験道と山内聖地—、九州産業大学公開講座「北部九州の魅力再発見」、2017

②須永 敬、『神社日誌』にみる明治初期の英彦山、英彦山神宮前町同好会・英彦山

区・英彦山観光協会 共催講演会、2017

6. 研究組織

(1) 研究代表者

須永 敬 (SUNAGA, Takashi)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：90390004